The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	竹岡敬温名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2011, 61(1), p. 162-176
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51776
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

竹岡敬温[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出 ―

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2010 年 1 月 21 日
於　大阪大学待兼山会館（大阪府豊中市）

阪大で経済史を専攻

阿部　本日は経済学部で長年研究と教育に尽くされました竹岡敬温先生のお話をうかがいたいと思います。

先生は 1954 年に京都大学文学部フランス語フランス文学科を卒業され，さらに京大大学院文学研究科修士課程を 1957 年に修了されたのち，京都府の高等学校に勤務されました。そして 1959 年から 1 年間大阪大学の経済学部に在籍され，その後，阪大大学院経済学研究科で西洋経済史を専攻されています。フランス文学から経済史にご専門を替えられた理由，また経済学・経済史を学ぶ場として大阪大学を選ばれた理由についてまず，お話しいただきたいと思います。

竹岡　私は京大文学部の仏文の出身ですが，仏文の学生には当時，フランス文学を理解するためにはフランスの歴史を知らなければならないというふうに考えている学生が相当おりました。私もその一人だったのですが，当時，宮本又次先生がお若い時に書かれました『フランス経済史概説』（1942 年）という書物が有斐閣から出ておりまして，これがフランス経済史の唯一の概説書で，私も仏文時代にこの本を読んでおりました。

数年前に，私と同期で京大経済学部を卒業いたしました親しい友人と久しぶりに会いまして，昔の回顧談にふけったのでありますが，その友人が「竹岡は仏文時代から『自分はフランス語を勉強して，フランス革命やパリ・コミューンを研究するんだ』と言っていた」と言うんですね。私自身は，自分がそんなことを言っていたということはまったく覚えていないのですが，かなり早くから私の関心はフランス史のほうに向いていたようです。

仏文の時の卒業論文はバルザックについて書いたのですが，バルザックの「人間喜劇」と呼ばれます小説群は，フランス革命が終わりました直後の 19 世紀初めのフランス社会の全体像を描き出したものでありまして，そのままフランス革命論，フランス革命の研究になっているのです。日本でフランス革命史学史が書かれます場合，ジュール・ミシュレとかイポリット・テーヌなどから始められるのが普通ですが，私はバルザックから始めるべきだというふうに考えております。

こんなふうにして，フランスの歴史を研究したいという気持ちになりましてから，それではどのような歴史を研究するかということを考えるようになりまして，最も骨格のしっかりした歴史，経済史を研究したいと思うようになりました。バルザックからフランス経済史への距離

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

というのは割に近いように思っておりますが，文学部から経済学部への移行には，それなりの時間がかかりました。

また経済学部に換わり，経済史を専攻し始めましてから数量経済史を目指すようになりましたが，そのことも数字という客観的な史料に基づいた骨組みの堅固な歴史研究を行いたいと考えたからです。

しかし，少し後の話を先取りしてお話しすることになりますけれども，数量経済史と言いましても，アメリカのニュー・エコノミック・ヒストリー，あるいはエコノメトリック・ヒストリーのような非常に手の込んだ，複雑化した数量経済史というのは私の性に合わなくて，物価史に始まって，やがて外国貿易とか貨幣鋳造，穀物収量，織物生産などの経済活動のさまざまな分野や，さらに人口・宗教・政治・思想など経済以外の領域にも数量的研究を適用していきました一般に時系列史と呼ばれるようになります数量的歴史研究，つまり史料的基盤の脆弱ではない数量的歴史学のほうが私は好きなんですね。

また文学から経済学に換わりましたことについては，次のようなこともあったと思います。終戦の年，私は中学の２年生でしたけれども，この中学２年生の時から関西日仏会館に通いましてフランス語の勉強を始めました。そのきっかけになりましたのは，私が親しくしていただき，尊敬しておりました中学校の英語の先生から受けた影響でした。この先生は家が貧しかったので，学費が無料であった東京高等師範学校で英文学を専攻された後，私が在学しておりました京都の中学校に赴任されたのでしたが，親類からの援助があったとかで，京大の大学院に入って英文学の研究を続けられました。そしてその後，京大の助教授になられましたけれども，40 歳代の前半に病気で亡くなられました。

この英語の先生から，「竹岡，君はフランス語をやったらどうか」と言われまして，それで早速フランス語の勉強を始めたわけですね。だから，大学に入学しました時には，私は相当フランス語ができるようになっていたのです。本当はそれほどでもなかったのですが，少なくとも自分自身はそう思っていました。

このように，自分のフランス語の実力を過信していたために，私は教養部在籍の２年間，一度もフランス語の授業には出席せずに，ドイツ語やイタリア語の勉強をしておりました。そのため，皆が一生懸命にフランス語を勉強していた２年間まったくブランクだったわけですから，専門課程に進んでから，フランス語の勉強で少し後れを取ったということを実感しました。

大学卒業後は研究者になることが自分にとって一番よい人生を送れることになるのではないかと自覚するようになったころから，このままフランス文学の道を進むより，少し方向転換をするのがよいのではないかと考えるようになったわけです。また，すでに文学そのものより，歴史により大きな関心を持つようになっていたものですから，歴史，特に経済史の勉強に進むようになりました。

そして京都の朱雀高校，この高校は私の出身高校ですが，その朱雀高校に勤務するようになってから，親しくなった京大西洋史出身の年上の同僚にある日誘われまして，宮本又次先生の講演を聞きに行ったのです。宮本先生のお名前は，先ほど申し上げましたように，先生の本をすでに読んでおりましたので私には親しいものになっておりましたけれども，この講演の中で宮本先生は，「近世の大阪はインター藩経済ですわ」というようなことを言われまして，大変気の利いた面白いことを言われる先生だなと思い，すっかり宮本先生が気に入りまして，この先生の所でフランス経済史を勉強したいと思うようになったわけです。

菅　先生のご経歴を拝見しておりますと，京大を出られた後，阪大の経済学部に１年だけ在籍

されて，その後は大学院へ進まれているんですけれども，それは宮本先生からのご指示があったということなのでしょうか。経済学の基礎を学べるからと。

竹岡　宮本又次先生には，経済学部の学士入学の試験を受ける以前に個人的にお会いしたことはなかったのですが，経済史の研究を志した以上，経済学をしっかり勉強したいと思うようになりまして，学士入学で学部に入り，2年間で経済学の知識をしっかり身につけて大学院に進学したいと思ったんです。

ところが実は，学年末試験を控えておりましたころに，宮本又次先生から原稿執筆のお手伝いを頼まれたのですね。当時，弘文堂で『社会経済史大系』という叢書が出版されることになっておりまして，その最終巻で各国の主要な経済史家の伝記と業績を解説するという企画になっておりました。フランスではアンリ・オゼールという学者が選ばれまして，宮本先生に原稿執筆の依頼があったのです。その原稿執筆のお手伝いを宮本先生から頼まれました。まだ私にはそんな力はなかったのですが，結局，お引き受けせざるを得ないことになってしまいました。

オゼールというのは，日本で言いますと本庄栄治郎先生みたいな人でありまして，フランスの経済史学の草分け的な学者です。そのお手伝いのために学年末試験の勉強ができなくなりまして，結局1年間だけの学部在学で大学院の入試を受けて大学院に進学することになったわけです。

当時の大学院には，経済史専攻の院生としては，後に近畿大学を経て金沢大学の助教授になられました川上雅君，それから松山商科大学を経て同志社大学の教授になられました藤田貞一郎君がおられました。これらの人と一緒に，神戸大学から非常勤で来ておられました宮下孝吉先生の西洋経済史の授業を受けたのです。

アルフォンス・ドプシュのドイツ語の中世ヨーロッパ経済史を読んだのですが（この話をしたあとで，藤田君に電話して確かめたのですが，私の記憶が間違っていまして，読んだのはドプシュではなくクーリッシャーの本でした），藤田君は日本経済史が専攻にもかかわらず，ドイツ語が非常によくできました。川上君は近畿大学を経て金沢大学の助教授になりましてから大学紛争に巻き込まれ，おそらく学生の攻撃の的になったからではなかったかと思いますが，精神的に少しおかしくなりまして，大学を辞めて，結局，その後もずっと岸和田の自宅で病身のまま療養を続けて，大学に復職することのないまま亡くなったのを大変残念に思っております。

当時，阪大の大学院の経済史関係の授業は，神戸大学から宮下先生が非常勤で西洋経済史の授業に来られまして，宮本又次先生がその代わりに非常勤で神戸大学に日本経済史を教えに行っておられましたので，特に神戸大学と大阪大学の経済史関係の若手研究者も大変仲良くしておりました。私も後に神戸大学の教授になりましたドイツ経済史専門の高橋秀行さんと，16世紀ヨーロッパの物価史に関する共同研究をまとめまして，これが社会経済史学会大会で発表しました最初の研究となりました。宮下先生は神戸大学のお弟子さんたちには厳しいことで有名な方でしたが，われわれ外での教え子に対しては大変やさしく接してくださいました。

宮本又次先生は，後に私が助手に採用されます時に「竹岡君，教育にあまり熱心になってはいけないよ」というアドバイスをされましたが，これは阪大に勤める以上は研究業績をしっかり上げよという忠告であったと思っております。

その宮本先生ご自身は教育に熱心ではなかったかと言いますと，そんなことはなく，先生の研究室で私一人を相手にフランス経済史の講義をしてくださいました。生徒の私が安楽いすに座りまして，先生はご自分の机の横にずっと

立ったまま，貧乏揺すりをしながら，先生特有の大阪弁の早口でフランス経済史の講義をしてくださいました。これが10回ぐらいは続いたと思いますが，大変感動しました。

私が学部や大学院で勉強をしていたころは，阪大経済学部の講義室はまだ木造で，キャンパスも大学の体裁を成していないと思われるほどみすぼらしいものでしたが，そのころと比べますと豊中キャンパスも非常にきれいで立派になりましたね。

私が大学院で勉強していたころは，まだ経済史は1講座しかありませんでした。したがって，いまとは違い，大学院を修了するのに必要な単位を取るために経済史関係以外の授業，経済政策，国際経済学，経営学，社会政策等々の授業にも出ました。経営学の授業では，後に阪大経済学部の会計学の教授になられます中村宣一郎さんと知り合い，その後も長く親しいお付き合いをすることになりました。中村さんは大阪外国語大学のイスパニア語学科を卒業後，いすゞ自動車に入社し，その後また大阪大学経済学研究科で勉強されてフランス会計学に詳しくなり，後にフランス政府招聘の技術留学生として，私より少し後にフランスに留学されました。

このように，私はだいぶ迂回して経済史の研究にたどり着き，ようやく大学に就職できました。それは，後でも名前を出すつもりでおりますけれども，東京大学文学部の哲学科を卒業し，その後，経済学部に換わり，フランス経済史の専門家となられて東大経済学部に就職された赤羽裕さんも，私と同様のコースをたどっておられますし，外国では，このように複数の研究分野を経験して教職に就職する例は多数あるように思いますので，このような迂回生産が決して無駄だったとは思っておりません。阿部さんは，赤羽さんをご存じではないですか。

阿部　赤羽先生はお名前しか知りません。私が入学したころはもうおられませんでした。

竹岡　もう亡くなっておられたのですね。

阿部　亡くなっておられました。

竹岡　そうですか。

阿部　赤羽先生は東大では，低開発経済論という名前の授業を始められたのですね。

竹岡　川田侃先生の下の助教授としておられたのですね。

大阪大学経済学部へ奉職

阿部　先生は1962年7月に経済学研究科博士課程を退学されて，8月に経済学部の助手となられました。翌1963年に講師，1968年に助教授，1976年に教授へと昇進されていきます。この経済学部に奉職されたいきさつについてお話しいただきたいと思います。それから，かなり長い期間にわたりますが，先生がご在職中の経済学部の特色，あるいは印象に残っている事柄についてお話しいただければ幸いです。

竹岡　博士課程に進学して，間もなく助手に採用されたわけですが，私が助手に採用された時には，大学院で一緒に勉強しておりました川上君は近畿大学に就職が決まり，藤田君は松山商大に就職が決まっておりました。ただし，藤田君は松山商大の助手になった後も，引き続いて阪大大学院に在籍しておられました。

私の最初の経済史の論文は，エルネスト・ラブルースの物価史の研究を下敷きにいたしまして，18世紀フランスの物価史とフィジオクラシー（重農学派）の成立との関係を論じたものです。

私がフランスの物価史の研究を始めたと同じころになりますが，阪大の経済史研究室は，小葉田淳先生をリーダーといたします京大文学部の国史研究室とともに，アメリカのロックフェラー財団から，日本の物価史研究のための基金を与えられていまして，近世大阪の物価のデータを収集しておりました。これは1963年に『近世大阪の物価と利子』として創文社から

出版されまして，京大の国史研究室のほうも中世日本の物価データを収集した本を刊行しておられます。この『近世大阪の物価と利子』の中では，西洋諸国における物価史研究の動向と物価史研究の意義を解説した序文を宮本先生が執筆されまして，私はそのお手伝いをしたわけです。

私が最初の経済史の論文を書く際に参考にしましたラブルース教授の研究，それは『18 世紀フランスの物価と所得の動き概要』と題された本でありましたが，この書物は，極めて丹念な史料批判によりまして史料的基盤を強固にしつつ，データの収集，処理に関して非常に手堅い手続きがとられていまして，ひたすら統計的な手続きを越えない態度が守られていた著作でありました。これこそ学問であるというような感じを与える研究です。

その後まもなく，このラブルース教授の来日が実現いたしました。阪大にも来学されまして，1963 年 4 月に本部の会議室で講演をしていただきました。その講演には，阪大のスタッフを中心に 50 人ばかりの研究者が集まりましたけれども，講演が終わりました後，社会経済研究施設の市村真一先生がラブルース教授に対して，「あなたの方法とサイモン・クズネッツの方法はどこが違うのか」と質問されまして，ラブルース教授は「クズネッツと私とは史料に対する態度が違う。しかし今後，経済学者は次第に経済学者ではなくなり，歴史家は次第に経済学者になるだろう」と答えられたのが大変印象的でした。

私が 1962 年に助手に採用されました時は，歴史系の講座は経済史 1 講座だけでしたが，1964 年には日本経済史講座が新設されまして，1968 年には，さらに経営史講座が新設されました。その後，私が経済史講座の講師，助教授，教授に順調に昇任できたのも，このように講座が順次増設されてきたおかげなのです。

私が助手になりました時は，経済史講座の教授は宮本又次先生で，助教授が作道洋太郎先生でありましたが，その後，作道先生は 1968 年に経済史講座から日本経済史講座に移籍されまして，さらに 1970 年に経営史講座に移られました。また 1969 年には，滋賀大学から原田敏丸先生が阪大に移られまして，日本経済史講座の教授として着任されたわけであります。これらの歴史系の講座が，大講座としての経済史講座に統合されますのは 1984 年のことです。

このころの阪大に関しまして強く印象に残っておりますのは，やはり大学紛争ですね。1964 年から 1966 年までの 2 年間，私はフランスに留学したのですが，その帰国後，まだ講師でおりましたとき，1968 年にパリ大学から始まりました大学紛争の波が，間もなく日本の大学にも押し寄せてまいりました。

私は大学紛争が起こります少し前までパリ大学にいたのですが，そのしばらく後に「5 月革命」とか「5 月危機」とか言われるようになった激しい紛争が起こるような気配は，私にはまったく感じられませんでした。それなのに日本の学者の中には，フランスの大学紛争が起こるべくして起こったんだと言って，それが起こることをまるで予見していたかのように言う人がおりましたので，不正直な人だと思いましたね。

関西では関西学院大学で最初に紛争が起こりました。私はそのころ，関学に非常勤講師で行っておりまして，関学で始まった紛争を対岸の火事のように眺めていたのですが，間もなく阪大にも波及してまいりました。

阪大経済学部の学生は全体的におとなしく，経済学部では，学生との間で大衆団交を開くという必要もなかったのでありますが，文法経の建物が共通でありましたので，学生によって研究室が封鎖されてしまい，授業もできなくなり，経済学部でも学部長が短期間で何人も交代されるというような異常な状況になりました。

この時，学内委員として広報委員会が組織さ

れまして，各学部から選出された教授が毎日のように集まり，『大阪大学の動き』というパンフレットを編集しまして学内に配布していました。経済学部からは，最初，宮本又次先生が広報委員会の委員として出ておられたのですが，先生が過労で倒れられたために，急遽，私にそのお鉢が回ってまいりました。他学部から出ております委員の先生はみんな教授で，若いものは私だけでありましたが，副委員長にされてしまいました。委員長は教養部の原田朝吉教授でした。

委員会は毎日本部に集まりまして，夜遅くまで会議をして，終電車で帰る日も多くありました。総長や大学の執行部としましては，この広報委員会を執行部の情宣機関にしたかったのですが，民青系や民学同系の教授も出ておられまして，情宣機関にするというのは不可能でありましたので，そのため，阪大の中のいろいろな層の動きを，なるべく客観的に伝えるという趣旨で広報を編集いたしました。私は反体制派の教職員グループの集会などにも出席いたしまして，それを記事にするということもしたことがありました。

経済学部では，大衆団交というような性質の集会は全然しなかったので，その点で他学部とは違っていたのですが，経済学部でも豊中市の市民会館を借りて，学生に授業実施の見通しなどを説明するための会合を開きました。その時の学部長は統計学の横山保先生でありまして，この時の集会では私が宮本匡章さんと二人で司会を務めました。

学部長の横山先生は，当時，関学の学生であった息子さんが，関学での紛争の活動家の一人であったという個人的な悩みを抱えておられました。横山先生は，その後，この息子さんをフランスに行かせて，ようやく日本の大学紛争から抜け出させることができたのです。

後日談になりますけれども，横山先生の亡くなられたずっと後のことです。大学紛争から30年以上たっておりましたが，関西在住のフランス政府給費留学生のOBが招かれまして，大阪のフランス政府の機関でありますアリアンス・フランセーズでパーティーがありました。その時，フランスでの長期の滞在から，フランス人の女性と結婚して帰国して，アリアンス・フランセーズに勤めておられた横山先生の息子さんに会いまして，大変驚きました。フランス人の奥さんは南仏出身のようで，非常に家庭的な感じの人で，生前の横山先生がどんな人だったかについていろいろと聞かれたりしたことがありました。

阪大の経済学部の学生は比較的おとなしかったのですが，それは阪大ではマルクス経済学の教官がいず，もっぱら近代経済学を教えていたことと無関係ではなかったと思います。そのころは社会経済研究所も含めて，阪大経済学部は近代経済学のメッカであるというのが売りものになっておりました。その後，ソ連の体制が崩壊して，マルクス経済学が落ち目になり，近代経済学もまた一時のような人気がなくなりましたけれども，最近の阪大経済学部はどのようになっているのでしょうか。

阿部　紛争のことについて詳しくお話しいただいたのですが，いま近経のメッカというお話がございました。この当時の大阪大学は，おそらく日本で最も精力的に近代経済学の研究を進めていたと言えると思いますが，先生がご覧になって印象に残っているような方，あるいはご業績など何かございませんか。

竹岡　特に社会経済研究所のスタッフは，皆，近代経済学者としてなかなか実力のある，そうそうたるメンバーをそろえていたと思いますね。経済学部の若手メンバーでは小泉進先生や新開陽一さんがおられたり，また経済史に近い方ですが安場保吉さんなどもおられて，元気に活躍しておられましたね。そのほか私と同世代では貝塚啓明さんとか，蝋山昌一さんとかがおられました。

阿部　もう一つは経済史の先生方で，宮本先生のお話をだいぶ詳しく伺いました。作道先生と原田先生のお名前も出ましたけれども，そのほかにはどなたか。

竹岡　森泰博さん。森さんは阪大経済学部の出身で上智大学に就職されたのですが，日本経済史講座が増設されたあと，上智大学から呼び戻されて阪大経済学部の講師となられました。しかし，その後，宮本又次先生が停年退職後，関西学院大学商学部の教授になられたとき，森さんを一緒に関学に連れて行かれました。

阿部　宮本又郎先生は，紛争のころは助手でしたか。

竹岡　宮本又郎君が助手になったのは，もう少し後のことで，1972 年だったと思います。

阿部　「宮本エコール」という言葉がありますように，宮本又次先生はたくさんの門下生を育成されました。九州大学時代にも，すでに宮本先生は何人もお弟子さんを育てられていましたけれども，大阪大学に来られてからということですと竹岡先生は比較的初期の門下生ということになりますね。

竹岡　私はむしろ，経済史の研究には遅れて来た人間だと思いますけれども。私より先輩には…

阿部　安岡重明先生。

竹岡　安岡さんは，すでに阪大経済学部第 1 号の博士号を取得されて，同志社大学の先生になっておられたと思いますね。

私は学部の時，宮本又次先生の日本経済史の講義に出まして，その時は先生の『日本経済史講話』（ダイヤモンド社，1946 年）という本がありますね，この本は口語体で書かれていまして，これをテキストにして講義をされたんですが，大阪弁で非常に早口だったので，それについていけなかったのか，最初 50 人以上は受講していたと思いますが，最後には 3 人ぐらいになりまして，私もその最後の 3 人に入っていたわけです。

宮本先生が私を残そうと考えられるようになったのは，やはり宮本先生の若い時に志されたフランス経済史の研究を引き継ぐ者として，私を残してくださったのではないかと思っているのですが。

宮本門下のグループは「宮本シューレ」とはいわず，「宮本エコール」とフランス語を使っていたのですね。社会経済史学会全国大会のたびに「宮本又次先生を囲む会」というパーティーをやりまして，全国にいる同門のものが集まったのですが，学界では得がたい実に温かい雰囲気の会で，皆この会に集まるのを楽しみにしていました。

教育・研究上の取り組み

阿部　いまうかがいましたのは，阪大の経済学部に奉職されていたころのお話ですが，それに関係して阪大ご在職中の教育・研究の面で重点的に取り組まれた事柄についてお話しいただければ幸いです。

竹岡　私の最初の経済史の研究は，近代初頭のフランスの物価史の研究をまとめることで，1964 年から 1966 年にかけてのフランス留学の成果を『近代フランス物価史序説』としてまとめ，これは創文社から 1974 年に公刊されました。

物価と賃金というのは，現存する経済史料の中で最も古くから継続して存在しております客観的なデータで，物価史というのは生産量や取引量に関する知識が十分でないプレ・スタティスティックな，統計以前の時代についての最も代表的な数量経済史で，物価の動きを通して，このような時代の経済の総体的な動きをとらえようというのが物価史の立場だと思っております。

この本の中で私が特に力を入れました一つのことは，物価や貨幣流通の動きを説明しますために，経済学の論理を適用しようとしたこと

で，経済学部出身の経済史家の皆さんの多くよりも，経済史の事実を説明するために経済理論を応用しようと努力したことです。私は経済学部を出ておりませんので，この私に不足しております点を補おうと努力したんだろうと思っております。

似たようなことが，後に書きました『「アナール」学派と社会史－「新しい歴史」へ向かって』，これは同文館から1990年に出されておりますが，この本についても言えるのではなかろうかと思っております。

フランスのいわゆる「アナール」学派の歴史学の刷新運動，1929年に『社会経済史年報』という雑誌の創刊によってこの学派が誕生しまして以来，経済史，歴史地理，歴史人口学，心性史，歴史人類学と歴史家の領域を大きく拡大していきました「アナール」学派の運動は，20世紀における最も重要な歴史学革新の運動だと思っております。この「アナール」学派の歴史理論を論じました本を書きましたのも，私が文学部出身ではありましても，西洋史の専攻ではなく，正式に歴史理論を学んでいないという，私の経歴上の欠点を補おうとして書いたという意味もあったのではないかと思っております。

また，2007年に出しました『世界恐慌期フランスの社会－経済・政治・ファシズム』（お茶の水書房）という本は，大阪大学を退職してから公刊したものではありますけれども，そのあとがきの中で書いておりますように，私は最初のフランス留学の時から，第二次大戦後の「アナール」学派の歴史家たちの研究が，もっぱら中世やアンシャン・レジーム期だけを対象にしており，現代史に向かうことがないことに不満を持っていまして，それが私に1930年代のフランスを対象にして，この本を書かせる動機になったのだと「あとがき」に書いておりますが，実はもっと実際的な理由があったのだということを，ここで申し上げておきたいと思います。

どういうことかと言いますと，阪大経済学部に就職いたしまして，経済史や西洋経済史のゼミナールを担当するようになって以来，ゼミに参加します経済学部の学生諸君の関心を，中世や近世の西洋とか，アンシャン・レジーム期のフランスに向かわせるということはなかなか困難でした。学生諸君はもっと新しい時代，現代に関心を持っておりましたので，彼らと関心を共有いたしますために20世紀の西洋諸国と日本を対象にして，特に1930年代の世界恐慌を共通のテーマにしてゼミを行ったのです。その成果がこの本です。したがいまして，この本が書けましたのは，阪大経済学部の私のゼミに参加してくれた学生諸君のおかげでもあったと思っております。

私は研究と教育というのは車の両輪みたいなものでなければならないと思っておりますけれども，経済学部で私が担当しました講義は経済史と西洋経済史で，どちらも概説的な講義でありまして，普段私が勉強しているフランス経済史の研究成果を講義の中でそのまま教えるということは難しかったのです。その意味で経済学部でも，たとえ聴講する学生が少数ではありましても，自分の日頃の研究をそのまま講義に生かせる特殊講義のようなものが，もう少しあってもよいのではないかと思っておりますが，私はゼミで教育と研究の一致という考えを多少とも実践できたのではなかろうかと思っております。

阿部　最後のお話にございましたけれども，ゼミで比較的新しい時代のことを教えられるようになったのは，いつごろからのことでしょうか。

竹岡　講師の時代に担当したのは，フランス語経済文献の講読ですね。ゼミを担当するようになったのは助教授になってからです。

阿部　いまでも講師ぐらいの方は，昔で言う外国講読－いまは「専門セミナー」と言う科目に含まれておりますけれども－を2年生程度の授

業で教えているようです。

お若いころはフランス語の原典講読をおやりになっていて，いまお話に出ました人民戦線とかナチスとかという比較的新しい時期のことをゼミで教えられるようになったのは，かなり後の時期でしょうか。例えばお辞めになる10年ぐらい前とか。

竹岡　いや，もう少し前からだと思います。

阿部　教授になられてからですか。

竹岡　フランス留学から帰国しまして，まだ講師で何年かおりましたので，助教授になったのは1968年ですが，助教授になって以後のことだと思います。それでも割に長くゼミを担当してきたと思っています。

阿部　ゼミでは，先ほどお話が出た物価史のように割に古い時代を教えるのが，学生の問題意識とかなりずれていたということでしょうか。

竹岡　そうですね。私が『近代フランス物価史序説』という本を出しました直後に，文学部の西洋史のほうから，その本をテキストにした講義を西洋史のほうでやってくれという要請がありました。私の講義に出席した西洋史専攻の学生の数は多くはなかったのですけれども，やり始めた直後に私は病気になって3カ月ほど入院することになりましたので，結局，実質的にはその講義はできなくて，出席した学生には私の本を読んでリポートを書かせて採点したということがありました。

フランス留学

阿部　いままでたびたびお話の中に出てまいりましたフランス留学ですが，これは1964年から1966年までの2年間，パリのソルボンヌ，それから高等研究実習学院第6部門（経済学・社会科学部門）に留学されたわけです。そのフランス留学中で印象に残っていることがおありでしょうか。

竹岡　話が後先になりますけれども，私が助手に採用されました後も，すぐには，フランス留学のことを考えてはおりませんでした。ある日，宮本又次先生と一緒に食堂へ昼食をとりに行きました時のことです。そのころは待兼山会館のような職員食堂というのはまだなくて，学生と一緒に昼食をとっていたのですが，その食堂で文学部のフランス哲学の澤瀉久敬先生とお会いいたしまして，澤瀉先生からフランス政府給費留学生の試験を受けるように薦められました。その時，初めてフランス留学というものを明確に意識するようになったのです。

しかし，関西在住者でフランスの留学生試験を受けようとする者は，京都の関西日仏会館の留学試験準備クラスを受講いたしまして，それから関西日仏会館の館長，当時はアンコントルさんという館長でしたが，この方の「アテスタシオン（推薦状）」をもらって受験するのが慣例のようになっておりました。しかし，私はそういう準備をまったくしていなかったのです。

それでどうしたものかと思いましたが，当時，仏文の助手をしておられました伊地知（均）さんが「アンコントル館長のところに同行して推薦状をもらえるよう頼んでやろう」と言ってくれまして，伊地知さんに連れられてアンコントル館長に会いに行きました。しかし，このアンコントル館長からは体よく追い払われまして，推薦状はもらえませんでした。それで，館長の推薦状なしに留学生試験を受けるということになってしまったのです。

ところが関西日仏会館で筆記試験を受けました後，口頭試問を受けるために東京に行ったのですが，口頭試問の順番を待っております間に，アンコントル館長が私のところに来られまして，「頑張りなさい」と声をかけてくれました。たぶん筆記試験が割によくできて，見込みがあると思われたのではなかろうかと思っております。

このように，大した準備も努力もしないまま留学生試験に合格したのでしたが，いくつか論

文を発表しておりましたこと，フランス語からの翻訳書も二つほど出しておりまして，すでに大学に職を得ていたということなどが有利に扱われたのであろうと思います。しかし，本当はもっとフランス語の会話力をしっかり身につけてから留学すべきであったと思っております。

ただ，フランス留学の目的ははっきりしておりまして，16 世紀の価格革命時代のフランスの物価と貨幣の動きを研究するということ，それに「アナール」学派の歴史家たちのもとで研究しまして，フランスにおける歴史学刷新の新しい動向を学んでくるということです。当時「アナール」学派は，創始者のリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックの後を継ぎましたフェルナン・ブローデルの指導のもとで急成長をしている最中でした。

そういう目的のために，私はパリ大学文学部に登録いたしまして，高等研究実習学院第 6 部門のゼミナールに参加することにいたしました。法学部と経済学部が合わさった法経学部がありましたが，法経学部ではなくして文学部に登録いたしましたのは，法経学部では「経済的事実の歴史」というような題の経済史を概説した講義しか行っていなかったのに対して，文学部ではラブルース教授のような優れた経済史家がおられて，フランス経済史の特殊講義を行っていたからです。

また，高等研究実習学院というのはゼミナール形式の授業を行っておりまして，その第 6 部門は 1947 年に「アナール」学派の創始者の 1 人でありますリュシアン・フェーヴルが設立し，「経済学・社会科学部門」というふうに，歴史学という名称はどこにもついていないにもかかわりませず，「アナール」学派の歴史家たちの活動の本拠となっていたのです。この高等研究実習学院第 6 部門は，その後 1975 年に独立いたしまして，社会科学高等研究院となります。

こうしてパリ大学文学部でラブルース教授の講義を聴き，高等研究実習学院第 6 部門のジャン・ムーヴレ教授の演習に参加し，コレージュ・ド・フランスのブローデル教授の講義に通うということが私のパリ生活の日課になりました。

当時，ラブルース，ムーヴレ，ブローデル，3 先生たちのもとに出入りしておりました若い研究者が，やがて「アナール」学派の第三世代を担うことになる歴史家たちになるのですが，彼らは当時まだほとんど無名でありまして，特にムーヴレ先生の演習では，これらの若い歴史家たちがムーヴレさんに呼ばれまして，よく研究報告を行っておりました。

ブローデル教授自身も，まだそれほど有名ではなく，ブローデルの名前がマスメディアに登場するということはほとんどありませんでしたし，コレージュ・ド・フランスのブローデル教授の講義の常連の聴講者も 20 名を超えませんでした。

ムーヴレさんの演習は土曜日の 9 時からでしたが，12 時ごろまで，たっぷり 3 時間ほど行われました。午前 9 時と言いますと，冬場のパリの朝はまだ薄暗くて，まるで寒げいこに出かけるような気分で教室に参ったものでした。

ただ，私が 16 世紀を研究テーマに選びましたことは，少し無謀だったと思います。16 世紀には経済関係の文書は，すでにフランス語で書かれるようになっておりましたが，まだ文法も確立しておりませず，フランス文法が確立するのは 17 世紀以後のことです。それからフランス語のつづりも一定してはおりませず，一日中，国立古文書館で 16 世紀の文書を眺め暮らしまして，1 つの単語も解読できないというような経験を何度もいたしました。

しかし，ムーヴレ先生は，私の選んだ研究テーマについて否定的なことは何も言われませず，テクストのあるジャン・ボダンとマレストロワの間で 16 世紀半ばに行われた貨幣物価論争を中心に研究をするように勧められました。

また，ご自分が集められましたフランス各地の物価データをくださったりもしまして，大変私の研究を助けてくださいました。

私より先にフランスで留学生活を送っておられました，フランス社会経済史専攻の日本人研究者としては，二宮宏之さんと，先ほど名前を出しました赤羽裕さんとがおられまして，2人とも後進の私に対して多大の援助を惜しまれませんでした。

お2人は，私が2年間の留学を終えまして帰国した後もなお，フランスにとどまって研究を続けておられました。赤羽さんは日本に帰国後，東大経済学部の助教授になられたのですが，残念ながら30歳代の末に大腸がんで亡くなられました。唐突な亡くなり方でした。

二宮さんは帰国後，東京外国語大学の教授になられましたが，留学中の研究生活のために体調を崩されまして，その体力の消耗を回復するために，帰国後，処方された血液製剤によってC型肝炎にかかられました。その後，一生病苦につきまとわれたにもかかわらず，二宮さんは厳しい闘病生活の毎日の中で，アンシャン・レジーム期のフランス社会経済史に関する多くの優れた業績を上げられました。しかし，やがて肝硬変が進行しまして2006年3月に亡くなりました。

お互いに学問的に切磋琢磨する中で留学生活の苦労をともにした経験は忘れがたいものがありまして，私は自分の最初の著書を赤羽さんの霊にささげ，二宮さんが亡くなった時には，雑誌『社会経済史学』に追悼文を執筆いたしました。

菅　先生が「アナール」学派に注目されたというのは，かなり日本では早い時期ではないかと思われるのですが，それは日本にいる時から，もうすでに注目されていたんでしょうか。

竹岡　ええ。留学前に，私は「アナール」学派というのは一番学問的に進歩的な学派であると考えておりまして，フランスに行ったら，ぜひ「アナール」学派について勉強をしようと思っておりました。

その後，かなりたってから，日本でも井上幸治さんなどが「アナール」学派に興味を持って，ブローデルの本を翻訳したり，また，「アナール」学派が社会史のさまざまな領域に進出するようになって以後のことだと思いますけれども，社会史が日本でも非常に流行し，「アナール」学派についての解説書を書く人がたくさん出てまいりました。

しかし私自身は，そうした「アナール」学派の解説書には不満がありました。「アナール」学派の歴史家たちは，皆，私が留学したころは経済史をやっていたのです。だから経済史をやっていた時代を知っている私自身が，「アナール」学派の歴史学刷新の運動について書かねばならないのではないかと，そんなふうに思ったわけです。

阿部　「アナール」学派の日本での受容の仕方は，いまおっしゃった社会史にかなり比重のかかった解釈ですけれども，先生の書かれたご本で勉強した限りですと，経済史もそうですが歴史人口学や歴史地理学など，非常に幅の広い学問ですね。

竹岡　ええ，その通りだと思います。「アナール」学派のいう「社会史」とは，経済活動はもちろん，人間活動の全体に目を向け，社会的なものの一体性を主張する学際的な正史研究なのです。

これは雑談ですけれども，私がフランス政府給費留学生としてフランスに行く前に，宮本又次先生が文部省在外研究員としてフランスのパリに1年滞在しておられまして，帰国されてから『フランス経済史学史』（ミネルヴァ書房，1961年）という本を出されました。私はその本の校正と，さらにその書評までしたことがあるのですが，この本のなかで宮本先生が業績を紹介しておられます経済史家たちは皆「アナール」学派の歴史家たちなのです。その当時，

「アナール」学派の歴史家たちは経済史をやっていたわけです。

ただ，この本は，「アナール」学派の紹介としては，創始者のリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックについては，宮本先生がフランスに行かれた時はすでにもう亡くなっておられましたので，その2人のことについては書いておられませず，「アナール」学派の紹介としては不十分なんですが，ところが宮本先生は別にエッセイで『西欧の史的回想』（日本評論新社，1956年）という本を書かれていて，その中にリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックのことがきちんと書いてあるんですね。

だから宮本先生というのは，ご自分ではいつも「自分は実証主義の歴史家ですわ」と言っておられましたけれども，ご自分ではあまり意識されないまま，しかし社会学に対する関心は持っておられましたから，その部分は意識的に，「アナール」学派に強い関心を持っておられたのではないかと思いますね。

大学行政について

阿部　阪大のお話に戻りますけれども，先生は1988年から2年間，大阪大学で評議員をお務めになっていますが，そのほか学生生活委員等いくつかの委員を歴任されておられます。そうした大学行政に関しまして，印象に残っていることがおありでしたらお教えいただきたく思います。

竹岡　評議員時代については，取り立てて印象に残っているということはありませんね。

学内委員につきましては，先にお話しいたしました大学紛争時代の広報委員会や学生生活委員会が記憶に残っております。学生生活委員は割に気持ちよくできたと思います。

それから，共通一次試験の実施が決まりましてから，阪大独自で行います第二次試験で，国語や英語の出題，採点をどういう体制でやるかということを相談します新しい入試のための委員会ですが，これはどういう名称がついていたのか，もう忘れてしまいましたが，その委員をやらされました。その時は，利害が一致します法学部の委員の先生と一緒に，経済学部や法学部の者にあまり適切でない仕事が押しつけられないように，国語や英語の先生と時には激しい議論を交わしたことなどをよく覚えております。これらの委員は，私の気性に合った委員だったと言えるかと思います。

委員を委嘱する学部長の側などから言いますと，誰にどの委員をお願いするかということは企業の中での労働の組織化と似ておりまして，日本の企業では将来の中級管理職候補者に，なるべく多くの異なったポストを経験させるという方針でやっているところが多いですね。それはそれで大きな意味があるのですが，大学の場合は，やはりなるべく適材を適所に張りつけるというやり方が好ましいのではないかと思われます。それでも各人の能力や適性を判断するということは難しいので，適材適所といってもうまくいかないことが多いだろうと思います。

大学行政では，昔は私が「阪大に勤めている」と言いますと，世間では医者に間違われたことがよくありました。それほど阪大は医学部や理科系の印象が強くて，文科系のものが総長を務められるようなことは，私のいた時代にはとうてい考えられませんでした。今度，文学部の鷲田清一先生が総長になられて，初めて文科系の総長が実現したのは，すでに退職しました私としても大変うれしいことに思っております。それだけ大阪大学も成熟したんだと思います。文科系の学部でも，すべての利害が一致しているわけではなく，時には対立したりしますけれども，文科系の総長が出たという事実は，特に文科系の諸学部の人々は大事にしてほしいことではないかと思っております。

直接の大学行政ではありませんが，私が関係いたしました経済学部と外国の大学との交流協

定につきまして，少しお話をさせていただいてもよいでしょうか。それはパリ商科大学（Ecole Supérieure de Commerce de Paris）と，阪大経済学部との交流協定です。パリ商科大学というのは，フランスのグランド・ゼコールの一つです。これは最初，日本経済に関心を持っておりましたクリスチャン・ソテールというフランスの経済学者を介して，建元正弘先生のところに意向を打診してきたのです。

その後，建元先生から私に連絡がありまして，1981 年から 1982 年に私がパリに参りました時，パリ商科大学に行きまして，具体的な協定内容について相談をしてまいりました。そして正式な協定は，私の帰国後，パリ商科大学の先生が来学されまして，学生の交流を主とした協力協定に調印したのです。

その後，毎年パリ商科大学から１名，阪大経済学部からも１名，学生を交換するようになりました。中村宣一郎さんが会計学の教授として着任されまして以後は，私と中村さんが窓口となってお世話をしておりました。私や中村さんが退職しましてから，この協定がどうなったのか。もう立ち消えになったのかもしれませんけれども，このパリ商科大学と阪大経済学部との協定は，経済学部が外国の大学と初めて結んだ国際交流協定で，これが刺激となり，その後，阪大経済学部はアメリカその他の諸国の大学との交流協定を行うようになったのです。

それから，これはお話ししないでおこうと思っていたことなのですが，あまりきれいごとばかり言っていてもいけませんので，私が個人的に経験した嫌なこともお話ししておきます。私は評議員時代同和問題委員もしていたのですが，当時の同和問題委員の仕事というのは，まるで砂上の楼閣をつくってはそれを自分で崩すというというような不毛な仕事で，大変空しい気持ちになっておりました。その頃，経済学部では学部長の選挙がありました。誰も学部長になりたいと思うような人はいないと思いますが，学部長にならなければ，私が同和問題の委員長にならされることが分かっていまして，同和問題の委員長にだけはどうしてもなりたくないと思っていましたので，複雑な気分で，なんだか陥穽に落ち込んだような気持ちになりました。私が同和問題の委員長になることを最後まで辞退したため，結局，新開さんがこれを引き受けてくれました。新開さんには悪かったと思っています。

菅　広報委員会の話なのですが，先生が苦労して出された『大阪大学の動き』などというのは，いまから見ますと非常に貴重な歴史的資料になっています。この目的というのは，紛争の時代ですので，この状況を学内構成員が共有するというところにあったと理解してよろしいのでしょうか。また，そういうことをやろうとされたのは，どなたのご発案だったのか，ご存じではありませんか。

竹岡　どなたが発案されたのか。おそらく総長やその周辺の執行部からだろうと思いますね。ところが各学部から出てこられたメンバーの中に，先ほど申し上げましたような民青系とか民学同系の先生がおられました。だから執行部の情宣活動の機関になるということは無理だと判断されまして，それならばどうしたらいいか，阪大の中の教官だけではなく，職員や学生も交えた紛争の中の動き，これを皆さんに広く知らせて，阪大の状態を少しでも正常化させるために役立ちたいという趣旨で『大阪大学の動き』を公刊，配布していたのです。

その後長く，紛争以後も広報委員会は続いておりましたよ。メンバーもすっかり替わって。

阿部　実は私が最後の広報委員を仰せつかりました。私が評議員だった時です。いつごろからか評議員が担当するのが慣行になったようで，結局，あれは法人化の２年後の 2006 年３月に廃止されました。その時も確か，紛争の時から委員会がずっと続いているという説明を受けました。

阪大生へのメッセージ

阿部　最後に現在学んでいる大阪大学の学生諸君に対する先生からのメッセージをお願いしたく思います。

竹岡　阪大生に対するメッセージということですが，阪大の卒業生，阪大の学生は，特に経済学部の場合は，ほとんどが都市銀行や大手商社，大規模な製造業に就職してしまいますけれども，公務員とか政治家，あるいは研究者などを希望する者がもう少し多く出てもよいように思われます。阪大経済学部の卒業生が卒業後，いろいろな異なった多岐の分野で活躍してくれれば，もっとよいのではなかろうかと思っております。

しかし，阪大ぐらいの大学になりますと，難しい入学試験に合格しました学生は，自分が阪大生であることに誇りを持っておりますし，この誇りは卒業後も続きます。

経済学部の学生に関して言いますと，学生は卒業後も自分が所属していたゼミに対する帰属意識が非常に強いですね。卒業後も，ほとんどのゼミの卒業生が毎年年賀状をくれますし，卒業後何年もたってから，卒業生自身が定年になり第一線を退いてからも，ゼミの先生の家を訪ねてくれるものがあります。また，別に大した世話もしていないと思いますのに，ゼミで教えられたという，わずかばかりの恩義を大事に思ってくれる先生孝行なゼミの卒業生が何人もおりまして，そのことは本当にうれしいことです。

阪大の学生は割によくできますので，教育する側にとっても非常に楽で，卒業後もいつまでも人間的な関係が切れずに，阪大で教えております者は教育の楽しみを十分に味わうことができて幸福だと思っております。

竹岡敬温名誉教授略歴

1932年 1月	生まれる
1954年 3月	京都大学文学部卒業
1955年 4月	京都府立高等学校教員（1962年7月まで）
1957年 3月	京都大学大学院文学研究科修士課程修了
1960年 3月	大阪大学経済学部退学
1962年 3月	大阪大学大学院経済学研究科修士課程修了
1962年 7月	大阪大学大学院経済学研究科博士課程退学
1962年 8月	大阪大学助手経済学部
1963年11月	大阪大学講師経済学部
1968年 8月	大阪大学助教授経済学部
1976年 1月	大阪大学教授経済学部
1988年 4月	大阪大学評議員（1990年3月まで）
1995年 3月	大阪大学停年退職
1995年 4月	大阪大学名誉教授 大阪学院大学経済学部教授

Memoir of Osaka University Talked by Professor Emeritus Yukiharu Takeoka

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Yukiharu Takeoka related to the history of the Faculty of Economics at the Osaka University. Professor Takeoka, who was born in 1932, firstly studied French Literature at University of Kyoto. Working at a senior high school in Kyoto Prefecture, he came to conduct his research as a student at Graduate School of Letters at University of Kyoto, at Faculty of Economics and finally Graduate School of Economics at Osaka University. During these several years around 1960 his interest moved French literature to economic history of France under the influence of Professor Mataji Miyamoto. Professor Takeoka was promoted to Assistant Professor, Lecturer and Associate Professor, and became Professor in 1976. He was one of the pioneers of quantitative economic history in Japan, especially the field of history of prices, and introduced many important academic achievements of France into Japan. Professor Takeoka also fostered many students, contributed to the administration at Osaka University, and in 1995 became Professor Emeritus of Osaka University and Professor at Osaka Gakuin University.